

## 「おおらかさ」

(第六回)

徳島に松竹大歌舞伎がやってきた。当地では久方ぶり。今回の演目は、歌舞伎十八番の内から「毛抜(けぬぎ)」。場面

は、美人の誉れ高い小野小町を輩出した小野家である。縁組みが

まとまった娘が病気になる。それも、

髪の方が逆立つという奇病で、一族は困り果てている。こ

こで市川團十郎が登場し、調査を始め

た。不思議なことに床に置いた毛抜きが

ひとりでに踊りだす。一方、真鍮(しんちゅう)製のキセルは動かない。

姫の櫛(くし)を調べた團十郎は、ものの見事に、悪い家老が仕掛けた天井裏の磁石を見破ったのである。

舞台で使ったのは、馬蹄型の小さな磁石ではなく、東西南北を示す大きな羅針盤。方位計に磁

力はなく、実際には鉄製の毛抜きが動くことはないが、この演出で作者の意図がよくわかる。

歌舞伎には、花と夢とウソがあるという。言い換えれば、華やかさと派手さ、現実離れた世

界、衣装・音・ストーリーの誇大表現、の三要素だ。

枝葉末節を気にせず、

ゆったりとした気分  
で泣いたり笑ったり  
することで、心が癒  
される。

元来、日本の生活・文化は太陽のよう  
におおらかだった。  
しかし、現在、アナログからデジタルへ、婉  
曲から直接的表現へと  
変わりつつある。

人間とは人の間に存在するが、人と人との間の  
クッションは次第になく  
なってきた。ハリネズミみたい

に、お互いの針で傷つけあっている  
いだろっか？ オブラートに包まれて、  
ふわふわした世界もまた良い  
ものである。

(徳島大学附属病院内科医師)

# 健康のススメ

## 板東 浩